

樹里安だより



2022年
Vol.42



\植木屋さんの/
おすすめ植物

その7

ロドレイア ヘンリー
(レッドファンネル)



ロドレイア ヘンリーってどんな植物？

中国・雲南省原産の花木で、春の時期に花を付ける数少ない常緑高木である。深緑の葉に鮮やかなローズレッドの花の対比が美しく、特徴的な花姿でも目を引く。強健で、自然な樹形を保って成長するため、シンボルツリーとするのがオススメ。原産地が亜熱帯地域であるため、寒さや雪、乾燥には多少弱いが、関東以西の温暖な地域であれば栽培可能である。



川口市公園紹介記

その7

歴史と自然、文化を紡ぐ 緑のオアシス

～赤山歴史自然公園・イイナパーク川口～

大地に根ざした歴史と文化の記憶

東京メトロに直結、埼玉と東京・神奈川を結ぶ地下鉄「埼玉高速鉄道」愛称埼玉スタジアム線。この新井宿駅の1.5kmほど北東に「赤山」という場所があります。

江戸幕府が編纂した地誌『新編武藏風土記稿』(1830年完成)によると、「旧蹟陣屋跡村の東北の方にあり…寛永六年伊奈半十郎忠治が構えしより…寛政四年没収せられし時に廢して、今は御林となれり、其構の内凡二萬四千坪廻りに堀を構へ土居を築き、北の方は沼を以て要害となし、其餘の三方に家人の住宅あり、…北の方に石神口といへる門をも建て、…今はたゞ土居の跡を残りしのみにて雜木生い茂り」との記述が見られます。

この中に書かれている「陣屋跡」とは赤山陣屋のことを指し示しています。江戸時代初頭に関東郡代(幕府直轄領を支配する大代官)伊奈氏が築いたもので、地元の人々が、古くから「赤山城」と親しみを込めて呼んでいます。陣屋の総面積は何と77haもの広さを誇っていました。

赤山近隣の安行原中山家に伝わる『赤山陣屋敷絵図面(市指定文化財)』を紐解きますと、往時の陣屋の西側を取り囲む長大な外堀と隣接する家臣屋敷の場所が見て取れます。この場所が、今回ご紹介する「赤山歴史自然公園」イイナパーク川口です。この愛称は一般公募で選ばれ

ましたが、ネーミングの由来は、赤山城主伊奈家の「いな」と良いという語彙の「いい」と掛けた言葉だそうです。

大地に刻まれた連綿と続く歴史の一齣が、この愛称からも窺い知ることができます。

赤山陣屋敷絵図面 ▶
(個人蔵)



※ イイナパーク川口

日本を代表する建築家の作品群

60,000m²にも及ぶ広大な公園の中に、ひと際目を引く風貌の建物が点在しています。歴史自然資料館、地域物産館、そして、隣接地にある川口市めぐりの森の三つの建物です。

2013年、建築界のノーベル賞と言われる「プリッカ賞」を受賞。文化功労者で芸術院会員の日本を代表する建築家「伊東豊雄」氏が設計を手掛けた作品です。氏は、代表作の仙台市にある複合文化施設「せんだいメディアテーク(2000年)」や台湾台中市のオペラハウス「台中国家歌劇院(2016年)」を始め、国内外にある多くの著名建築の設計者として名聲を集めています。折しも昨年の10月、2025年に大阪で開催する「万国博覧会」大催事場の設計が、伊東氏に決定したというビッグニュースは記憶に新しいところです。

赤山歴史自然公園内の建築に通底する設計コンセプトは、「自然と親密な関係を結ぶこと」とされております。この建物が赤山の歴史と自然と繋ぎ、これから約50年、100年先にこの土地でどのような意味を持っていくのか。さらには、この場との関係性を如何に問い合わせてくれるのか、今から期待が膨らんでまいります。



市民の宝・水と緑のオアシス空間

「自然に恵まれ、都心から首都高速を降りると畠や雑木林がある。江戸時代から綿々と受け継がれた植木・盆栽産地としての歴史があり、身近で緑に浸ることができる」。それが赤山歴史自然公園です。公園の西側にかけて広がるエリアには、とんぼ池、里のせせらぎがあります。従前から生育するクヌギ、コナラなどの落葉広葉樹を活かした里山の雑木林として、川口の未来を担う子供たちの自然との触れ合いを大切にする環境学習の場として整備されました。首都圏有数の水と緑のオアシス空間を創出。SDGs時代にふさわしい日々の生活の豊かさや住みやすい街として誇れる市民の象徴として、末永く、愛される場となることを願ってやみません!

公園情報

開園年月日 平成30年4月3日
(プレオープン)

所在地 川口市赤山501-1

面 積 63,261m²

施 設 歴史自然資料館・地域物産館・ファーファーム・里のせせらぎ
とんぼ池・ハイウェ・オアシス(R4/4/25開設)他

ア クセス お車:「西新井宿交差点(県道足立川口線)」を東京方面に進行

電車:「SR新井宿駅2番出口」から

「赤山交差点(県道越谷鳩ヶ谷線)」経由で徒歩15分

バス:「コミュニティバス「みんななかまバス」戸塚・安行循環(1日)7便

「新井宿駅」から「門下町」下車、徒歩約8分



川口を
ふるさとに



小さな緑が 町を潤す

波多野 純 日本工業大学名誉教授



げんこつひとつの近所づきあい

東京下町の裏長屋で、すてきなマナーを教えていただいた。

「げんこつひとつ開けておく」

裏長屋それぞれの家の入口は、引き戸である。在宅中は、それをげんこつひとつ分開けておく。「いつでも訪ねてきていいよ」のサインである。ぴたっと閉まっていたら、金勘定か夫婦喧嘩の最中と言うことになる。まるでプライバシーと縁遠いその暮らしが、とても心地いいそうだ。

武士の住まいと町人の住まい

都市住民の理想の住まいは、郊外の「庭付き一戸建て」であった。「地価は決して値下がりしない」という土地神話が、それを支えていた。バブルがはじけ、土地神話が崩壊すると、理想の住まいも変化した。いま理想の住まいと言えば、川口の駅前に見られるような、駅近の高層マンションだろう。

江戸の住まいには、二つの大きな流れがある。武士の住まいと、町人の住まいである。大名から旗本・御家人まで武士の住まいは、規模はさまざまでも、屋敷地の周囲を長屋や堀・生垣で囲み、門を開き、玄関を設ける。内部も、接客など表座敷の部分と、家族が暮らす奥を明確に区分している。閉鎖性の強い住まいである。その伝統が「庭付き一戸建て」に受け継がれた。

いっぽう、町人の住まいである町家には、門も玄関もない。通りに面する表店(おもてだな)も、その奥の路地に面する裏店(うらだな)も、店舗や作業場などの生業空間と住まいが一体化し、外部に対してきわめて開放的である。

若狭湾に面した港町の魚屋で、「うまそうな魚ですね。どこか食べられる店を教えてください」と尋ねたら、「うちで食べてきな」と言われた。店の一角の茶の間で、その家の子供と遊びながら炬燵に入り、刺身、焼き魚、煮魚と堪能し、とんでもなく安くて最高にうまたがった。表と裏の生活を分ける気もない、町家の暮らしが肌で感じられた。

近代の都市政策と住まい

近代の都市政策の基本は、用途地域である。住宅地域を良好な環境に保ち、商業地域を高密度に開発し、工業地域に公害を閉じ込める。そのすべてが失敗に終わった。大気汚染は住宅地域にまで及び、商業地域における地価の高騰は、住民を追い出し、地域の未来は資本の論理に委ねられてしまった。

都心(駅近)に高層マンションが建ち、地域住民が帰ってき

たのは喜ばしいことである。しかし、高層マンションの設計原理は「庭付き一戸建て」の延長線上にある。エレベーターホールから住戸までの廊下は閑散としている。ドアを閉じればプライバシーが保たれる。生活が漏れ出すことはない。立地は庶民が暮らした商業地なのに、住まいの発想は閉鎖性の強い武士の住まいである。

町家の復権を

川 口の駅前に、都心（駅近）にふさわしい、開放的な町家の発想を取り入れたマンションが生まれないだろうか。たとえば、マンションのベランダの前を人が歩いている。緑越しに中と外で目が会つたら誘い入れてお茶を飲む。家へ帰つたら、パジャマに着替える今の生活感覚からすれば、かなり無理な提案だろうが、植木の町川口のアイディアを駆使すれば、答えは見つかると思う。

町とつながるリビングルームは、世界的に見たら珍しいことではない。図-1は、北オランダの港町フォーレンダムの住宅である。店舗ではないのに、ショーウィンドウのように飾り、

自分の趣味で道ゆく人を楽しませている。図-2は、アムステルダムのボルネオ島と呼ばれる住宅群である。何人の建築家が競作した住宅が水路に面して並ぶ。家族の生活が水路にはみ出して、とても楽しそうである。図-3は、ネパール・バクタプル市の商家である。煉瓦造の3階建てで、1階に店があり、2・3階で家族が暮らす。祭りの夜、すべての電灯が消え、窓に蝋燭が並んだときの感動は忘れない。

町とつながる住まい、町家が都心に戻つてこないだろうか。



図-1

北オランダ・フォーレンダムの町家型住宅 住人の趣味がリビングルームの窓から道にまで広がる。緑も丁寧にしつらえられている（左）。煉瓦の道と住宅の植栽が心地よい（右）

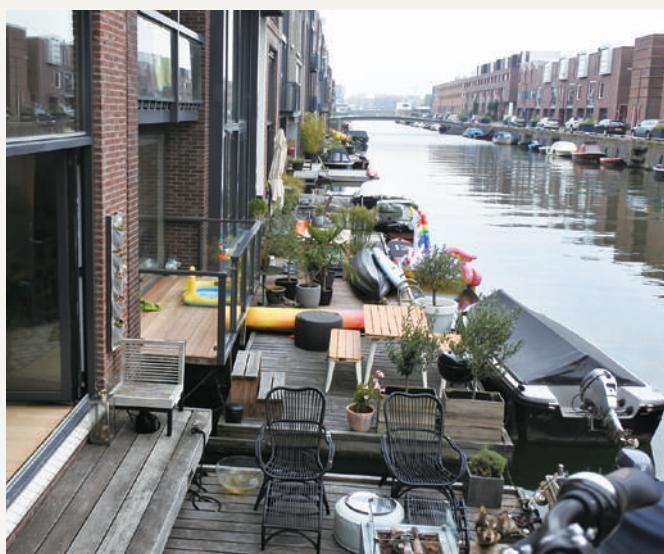


図-2 アムステルダム・ボルネオ島の住宅群
リビングルームが水路にはみ出している



図-3 ネパール・バクタプル市の商家
この上が住宅になっている



“藤浪”風にゆれる花に**美意識**

和人の心捉えた フジの花



藤波の花は盛りとなりにけり

なら みやこ
平城の京を思ほす君

～大伴四綱～

花

見といえば、現在は桜で特にソメイヨシノが主流だが、古代の人たちの心を捉えていたのがフジの花である。日本最古といわれる古事記に記載されているのをはじめ、奈良・平安朝時代には文集、詩集などにも盛んに取り上げられていた。

日本には2種の自生種がある。ノダフジとヤマフジで、いずれもマメ科の落葉つる性多年木。花は晩春から初夏にかけて長い房状の花穂を垂らし咲かせる。違いはノダフジのつるは右巻きで、

花は紫、まれに白色で花穂は30~90cmと長い。ヤマフジは紫紅色で花穂は20~30cmと短い。

木の寿命は長く、全国各地に国や県の天然記念物指定の古木や地域自慢の名木がある。京都・大江町には樹齢2千年を超える木が存在し、東京・亀井戸天神の老木は江戸時代にすでに名木とされていたという。岩手県一戸町、静岡県豊田村、宮崎県の宮崎神社などの木は国の天然記念物に指定されていて有名だが、特に名高いのが埼玉県春日部の大木。国の特別天然記





念物で、主幹の胴回り4m、四方に伸びたつる枝は20~30mもあるから驚くばかりだ。花見時に数百もの花穂を垂らし一斉に咲く姿は言い表すことのできないほどの見事な眺めだそうだ。

こうした古くからの長い年月が生み出してきたのが、フジを中心とした文化である。古事記には、神々の結婚にまつわる「藤の花衣の伝説」があり、娘に渡した衣服がフジの花となって花嫁を飾ったと記されている。奈良・平安朝時代には、貴族たちがそよ風にゆれる花を「藤浪」と言い換えて、こよなく愛したことでもあって文学、詩歌、美術、芸能など多方面に広まった。

万葉集には27首が収められているが、いずれも「藤浪」として詠まれている。「源氏物語」では天皇の中宮を気品の高い花の美人にたとえて「藤壺」、姫君を「藤の花」と表現している。「枕草子」には“松にかかる藤の花は好ましきこと”と書かれ、「伊勢物語」では、3尺6寸(約110cm)もあるあやしき花、とその美しさに驚いている。平家物語には、松にかかる藤の木、と記され、現在のように棚依りの栽培のない時代は、常緑の松にフジが寄り添って

育ち咲くのが、最も自然とされていた。

貴族たちも園芸品種を作出しても庭園に植栽し、藤見の宴を催すなどして花を楽しんだそうだ。

藤浪は、芸能、美術など多方面に広がりをみせた。謡曲、能で歌われ、歌舞伎でも取り上げられた。彫刻・陶器のデザインに使われるなどフジ文化は高まりを見せていた。

強じんなつる性の枝は、生活用具にも役立てられた。枝からとった繊維で布を編み、ざる、物入れ、はき物などを作った。

藤浪は、昔の時代だけで終わったわけではない。その後もいろいろな品種が作り出され、家庭向けの小さな鉢植えもお目見えするなど継承されている。

春の花が終わり、木々が若葉に覆われるとき緑の中で咲く紫色や紫紅色の花はいちだんと目立つ。さわやかなそよ風に誘われて、長い花が静かにゆれる風情は、昔の人たちだけではなく、現代人の心をひきつけてやまない。

くたびれ ころ 草臥て宿かる比や藤の花 ~芭蕉~

日本の伝承行事と植物

日本人は、古来より花や緑の好きな民族といわれてきた。四季折々にその季節の花鳥風月を鑑賞するだけでなく、草木の持つ生命力のたくましさや靈力を信仰とした無病息災や農作物の豊作などを祈願する多くの行事が伝承されてきた。近年、外国の行事に押されて影をひそめているが、日本独自の民俗文化も大事に守っていきたい。主な伝承行事を紹介してみよう。

どんど焼き

15日の小正月の行事。子供たちが中心となる火祭りで、「左義長」「三九郎」など地方によって呼び名は異なっている。会社や家庭で飾った門松、しめ縄、松飾りなどを集めて燃やし、豊年満作、無病息災、室内安全を祈願した。地域によっては、とんがり帽子の小屋を建て燃やす前の数日間、中で餅を食べたり甘酒を飲んだりして楽しんだ。今は河原や野原など燃やす場所が少くなり伝承している地域も減っている。



アサガオ市・ホオズキ市

7月初頭の東京・入谷のアサガオ市、浅草のホオズキ市を皮切りに全国の商店街のイベント、地域の夏祭りなどで売られる夏の風物詩。アサガオはさわやかな冷気の残る早朝から赤、紫、紅、覆輪など色とりどりの花を咲かせて楽しませてくれる。種まきから約65日間でスピード開花する上鉢植えで手軽に育てられるので人気の草花だ。小学校の夏休みの理科の宿題の材料にも利用される。ホオズキは、真っ赤に熟した果実に魅力がある。だが、観賞だけでなく、吊し人形を作ったり、実の袋を口の中で笛のように吹いたりするなど遊び道具にもされている。



お盆

祖先の靈を供養するため7月13日から16日(地方によっては8月13日~16日)まで行う行事。各家庭では、灯明で明るく照らした仏壇に菊、キキョウなどの盆花やご飯、果物、野菜、菓子などを供える。地方によってはキュウリ、ナスに細いくしを刺して足をつけ、馬、牛に模した供え物もする。これはお墓から靈を迎える時は馬に乗って早く、帰りは名残惜しいので歩みの遅い牛でゆっくり行つてほしいという願いからだそうだ。玄関前では3日間、おがらや木の皮を燃やして邪気払いも行う。

15日は僧侶を招いて棚経をあげて家族全員で祖先の靈を慰める。お盆が済むと供え物は川や海へ流して行事を終わらせる。お盆行事は、中国から渡来したが、それに豊作を祝う収穫祭、水神祭などが一体となって引き継がれてきたともいわれる。



アクセス



川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

ジュリアン
樹里安

発行 令和4年3月

公益財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家844-2

048-296-4021



<https://www.jurian.or.jp/>